

豊後掾 Bungonojo

脚本：笠谷 和比古

【前奏曲】

(ナレーション)

「時は、八代将軍徳川吉宗による享保の改革の時代。

風俗の取り締まりは世のすみずみにまで及んでいた。ことに心中沙汰には厳しい目が向けられ、これを双紙の題材とすることも、舞台上演することも堅く禁ぜられていた。

このような享保改革のきびしい風俗取り締まりの背景には、前代に幕府大奥を震撼させた、いわゆる江島・生島事件の影響もあった。江戸の大芝居山村座の奥座敷において、大奥の中老江島が役者の生島新五郎と密会を重ねていたことが発覚し、山村座は取りつぶし、江戸市中の芝居小屋に対する規制は強化され、芝居町以外の寺社境内における宮地芝居や大道芸の類も、ことごとく禁圧の措置がとられていた。

そのような折しも、上方において新しい浄瑠璃節を語って人気を博していたのが宮古路豊後掾みやこじぶんごのじょうであった。当時の浄瑠璃としては、上方にかの義太夫節があり、江戸では外記節、河東節などが盛んであったが、豊後掾の浄瑠璃語りの節まわしは、それらとは大きく異なり、艶やかにして細やかな情感に満ちみち、男女の人情の機微を深く語って余すところがなかった。

そんな豊後掾が尾張名古屋の芝居小屋に招かれて滞在していた享保18（1733）年の頃のこと、同地において一つの心中事件があった。男の名は畳屋の伊八、女の名は金村屋の遊女おさん。伊八が仕事に行き詰まった果ての心中であった。

豊後掾は、この事件に材を取って新作浄瑠璃を書き上げ、翌年正月の初春芝居としてこれを上演した。

題は正月を意味する睦月に、男女の別れえぬ恋心を織り込んだ『睦月連理玉椿むつまじづきれんりのたまづけき』（「玉椿」は正式には「椿」の下に「心」と記す一文字。ただし大漢和辞典に見えず）』。

この新作浄瑠璃芝居が名古屋の劇場で上演されるや、客席は熱狂の渦につつまれ、芝居は類例を見ないような成功を収めることとなった。

豊後節と『睦月連理玉椿』の評判は、すでに江戸まで聞こえており、豊後掾の東下りを求める声が江戸の民衆の間で高まりを見せていた。

しかし江戸は将軍家のお膝元。かねてより心中物禁止令を厳格に掲げてきた幕府を前にして、豊後節の心中浄瑠璃が上演されようはずもなかった。

【第一幕】

＜第一場＞ 尾張名古屋劇場街 享保19（1734）年3月頃

[場面、尾張名古屋の芝居小屋が立ち並ぶ繁華街。いましがた評判の京下りの浄瑠璃語り宮古路豊後掾による芝居が果て、観客は劇場から出てきて、それぞれ興奮醒めやらぬ表情で浄瑠璃を口ずさみ、豊後節を讃えている情景]

町人、庄兵衛「はあ、何と心うばはるる浄瑠璃節かな。義太夫や河東の節とはえらく
違いて艶やかなること、これまでついで聞きもおよばぬことじゃ」

町人、とよ「いまも胸が高鳴っております。われらもあのような心中に身をゆだねてみ
たいもの」

町人、直次郎「江戸も上方も心中物の芝居・音曲は御法度なれど、ここ尾張名古屋は御太
守様のお陰にて色恋沙汰も心中物も、勝手次第とは有り難きこと」

町人、庄兵衛「江戸は公方様の厳しき法度にて火が消えたるような逼塞の有様とか」

町人、ふさ「さりながら江戸よりの文によれば、近年は御政道も何とどのう、緩やかに改
めらるる趣も聞こゆるとかや」

町人、直次郎「それとても知れたこと。江戸の公方様は心中沙汰が殊の外おきらいとか。
豊後浄瑠璃の興行は江戸にては、とても叶うものにてはあるまいぞ」

町人、とよ「それに引きかへ尾張名古屋はこの世の極楽」

観客の群衆「尾張名古屋はこの世の極楽。浮き世の限りを楽しもうぞ。

(拍子に乗って)

♪ 外記ばかま、河東かみしも、義太夫ももひき、豊後かわいや丸裸とかや♪
されどそは、物のあはれを知らぬ人のたわごとぞ。

恋いの道まことを映す豊後節。身も心もささげてこそその恋いの道。

心中こそは恋いの極め」

[観客たちが豊後節を口ずさみつつ舞台より消える。かわって舞台上手より豊後掾と文字
太夫の登場]

豊後掾「上方よりこの尾張名古屋に下り来って早三年が経った。この地は尾張大納
言様の御城下、まつりごとのよろしきを得て、天下に二つとなき繁昌ぶり」

文字太夫 「誠に思いの他の大入りの日々。御師匠様の精進のたまものゆえに御座いましょう」

豊後掾 「さりながら、これに安住しては芸も錆びてこようと言うもの。芸を磨き流儀を広めんがため、江戸に赴かん手だてを、あれこれと思案いたしたるところぞ」

文字太夫 「これは思ひもよらぬ仰せ。江戸にては心中物は固き御法度のはず。いかなる御答をこうむるやも知れませむ」

豊後掾 「江戸にては、江島・生島の一件より禁じおられし宮地の芝居なども、次第に再興の兆しも見ゆるそいな。よき潮時にてはないか、われらはこれより東アズマに下りて一旗あげてくりよう存念」

文字太夫 「それはいかにも無謀な企て。御身にいかなる災いの訪れるやも知れません。なにとぞ思い直してくださりませ」

豊後掾 「もとより芸のうえにて罪咎を受くるも覚悟の前。厳しき御法度のあらばこそ、芸の錬磨も一段と心の籠もると言ふもの。われは一足先に江戸に赴く所存。自然、わが身に変事あらば、豊後の芸道は汝が後の世に伝えよ」

文字太夫 「心得ました。様子次第、私も後より江戸に赴こうと思います」

豊後掾 「されば將軍のお膝元へ豊後浄瑠璃もて赴こうよ」

<第二場> 江戸城中、將軍吉宗の御座之間

[場面、江戸城中の將軍御座の間。正面奥に將軍吉宗。その脇に老中四名が侍座。江戸町奉行大岡越前守が手前に座して芝居問題の政策変更を言上。それをめぐる評議。]

老中、松下右京大夫

「何と大岡殿、そはあまり無謀の論ならずや」

老中、水原和泉守

「その豊後節とやらん、上方より流行りたる浄瑠璃のことは噂にも聞き及びたれど、いかにもみだりがわしき節まわしにて、淫風ハブウのものとか。それのみにても許さるべくビョウもあらなくに、まいて心中沙汰を語りおるとは言語道断」

老中、坂田讃岐守

「風儀の乱るるは必定、掌ヲゴコロを指すがごとし」

大岡越前守 「仰せ尤もなれど、この大岡、いささか存念が御座います。江島・生島の一件よりこの方、厳しき御制法うらつづき、江戸の街は衰微に沈み、民の生業もままならず。しばし御制禁をゆるめられ、芝居町の繁盛を計られるこそ肝要と心得ます」

将軍、吉宗 「汝の申すは理可別なれど、芝居の再興はものにこそよれ。心中物はならぬぞ心中沙汰は禽獣に等しき振る舞い、とても許さるものにあらず」

大岡 「畏まって候、さりながら。心中芝居はよしなきことながら、民の誠の心をうつしたるにおいては相違なきこと。人の心は木石にあらず、縄もて絡め取らんとするとも、その真心を滅するあたはず。神代が世より男・女の恋の心のすなおを尊ぶは、わが日の本の国の長き習い、敷島の道もまたこれをもて宗としております」

老中、坂田 「そは、汝が田安様へ推挙せし賀茂真淵とやらん人の胡乱ウロンの言いごとや」

老中、水原 「ならぬぞ、ならぬぞ。ここは江戸、かしこくも将軍様の御膝元。武威ブイ弓箭キウセンのきびしき土地柄にて、京公家キウケの歌よみぶりとは一つにあらず」

老中、松下 「ならぬぞ、ならぬぞ。心中ごとき由無き事は、ただ人倫・風俗を乱すのみにて一徳なし。人欲をもっぱらとなして、五倫・五常の道を長く絶やさむ」

老中四名 <カリカチュア風に繰り返し>
「ならぬぞ、ならぬぞ、心中物はならぬぞ。五倫・五常の道を破りて、柔弱の闇に世を引き入るのみ」

大岡 「仰せ尤もなれど、さりながら。天下のまつりごとは民の心をもて標シべとなすとも言えり。天もの言はず、ただ民をして語らしむるがゆえなり。民の求むるところを、あながらに禁ずるは公儀の御政道にあらず。あるいはまた言えり、君主は民の楽しみたる後に楽しむと。心中芝居の禁圧は、恐れながら、上様の御好みの一条に出たるものにあらず候や」

老中、水原 「推参なり大岡！ 控えよ」

吉宗 「いや、苦しからず。諫言、もっとも珍重なり
<しばし熟考の沈黙>
公儀の政道は、民の求むるところを求めよと申すか。民の声は天の心に他ならずと申すか。

<熟考>

民あつまりて国をなし、国いで来りて君を立てるとかや、されば民は国の本と唱う。しかれば民のための政道にして、君の好みのための政道にはあらず。

まこと大岡が申すところ理可別と覚えたり。

<大岡に向かって>

このうえは、江戸の芝居においては汝が裁断に任すべし。よく心して取りはからえよや」

<大岡の安堵の表情、老中たちの不満顔の陰悪な雰囲気。問題をクリアした安堵・達成の感情とともに、いずれ迎えるであろう破綻の予兆との交錯する中で、舞台は暗転して第三場に静かに移行していく>

<第三場> 江戸吉原、茶屋井筒屋の座敷

[場面、遊女若菜と豊後掾および禿加口、幫間、さらには店の女将まで顔を並べて賑やかな酒宴。若菜と豊後とは、ちょうど初会から裏を返したあたりの関係。酒を酌み交わしつつの語らい]

【茶屋の遊芸】

女将 「豊後さまの浄瑠璃はたいそうな評判。江戸の町中、豊後節のうわさで持らきりに御座ります」

幫間 「芝居町では大芝居もかた無しとか。みな豊後様の芝居のほうに客が集まっております。いずれ大芝居のほうも頭を下げて、お頼みに参りましょう」

豊後掾 「いやいや、中村座より初春の興行をはや頼まれましたぞ」

女将・幫間 「それはおめでとう御座ります」

若菜 「豊後節の繁盛は、わらはごときにまで聞こえております。はからずもこの若菜、豊後様と馴染みとなれるは神仏のご縁かと嬉しう存じます。さりながら、われら遊女は豊後様の舞台を見ることさえも叶いませぬ。

<モノローグ風に>

あな、うらめし。遊女づとめの悲しさは、籠の中なる鳥のごと、人の楽しむ芝居とて、ついで目にする時もなし。空飛ぶ鳥の羽もらて、天翔けゆくことが叶はばこそ。

ああ、せめてもの幸いは、豊後さまに会えしこと。世にも名高き豊後節、ぜひに一節聞かせくれなまし」

幫間 <いきなり、すっとんきょうな調子はずれで豊後節「心中道行きの場」を唄いはじめる>

「雪と綿とは同じ白さでも、底の心のうらおもて…」

女将 「やめとくれな。これじゃ心中の覚悟も腰砕け」 <一同 笑>

幫間 「ささ、女将。恋のきわめじゃ、ふたりして冥途にまいろうぞ」
<幫間、女将の手をとって、ふたりながら『睦月連理玉椿』心中道行きの
場面の座興。まわりは、やんやと囃し立てる>

<一同にぎやかに興じているところに、文字太夫が名古屋から到着の報せ>
禿加口 「文字太夫さま。お着きに御座りまする」

文字太夫 「ただいま参りて御座います」

豊後掾 「おお、待らかねた。はよ、こなたへ。
なんじが居れば百人力。文にも認めたる通り、初春ハツル、中村座の狂言は
われらが玉椿。一世一代の浄瑠璃芝居を見しょうぞ。ここが性根の置き所、
江戸の町に豊後の花を咲かしょうぞ」

文字太夫 「江戸は心中御禁制と聞き居れば、お上木のお答がもいかならんと案じて
おりましたが、思案に代わるこの繁盛。まことに目出度きことに存じます。
<拍子に乗って>
されば中村座が初春狂言は、江戸の豊後の事始め。千代に栄える事始め。」

豊後掾 「江戸の豊後の事始め。千代に栄える事始め」

若菜 「江戸の豊後の事始め。千代に栄える事始め」

一同 「江戸の豊後の事始め。千代に栄える事始め」
<一同、豊後節の前途を祝して杯を高く掲げるうらに場面転換>

<第四場> 江戸中村座の舞台 享保20(1735)年正月

[場面、江戸中村座の内部。舞台正面奥に舞台が設けられ、脇に棧敷がしつらえられている
趣き。観客の歓呼のかけ声の中に豊後掾の登場。]

「睦月連理玉椿ハツルツリタマツバ」(名古屋の心中事件を題材とした豊後掾の代表作)の上演。
舞台は心中道行きの情景。劇中劇]

(ウタカガ)

「雪と綿とは同じ白さでも、底の心のうらおもて、夢に夢見る夢人に、うつつと人によそ
ながら、暇乞付ゴイしてふたりづれ、色づく梅のつぼみより、いひかはしたる一筋が、今
宵まことと、うたがひの晴れつついづる星月夜、西へ心の一つ松、小夜婦の寝覚めを響く
らん」

(地)

「いざ行こうぞと至銚子ホコの、道のあかりの眩がエさは、かけ行燈をわれわれが、死にゆく身の送り火と、見返る軒に淡雪と、消ゆるに間なき浅ましや」

(伊八)

「なうゆおさん、そなたを根引きにかう功連れて出づるというたら嬉しかろ。ア、われゆえに黄泉功せの、旅は道連れ、世はなさけ、はかなの人の姿や」と泣くも泣かれぬ胸のうら、

おさんも共に涙ぐみ、

(おさん)

「はてこなさんも、わし故に、さかりの花のうめが香を」

(二人)

「吹き散らしたる朝嵐」

(伊八)

「せめて一日世帯タイして、ぬし女房といひいはれ」

(おさん)

「たとへいかほど浅ましき、賤ジの世渡りするとても」

(伊八)

「厭作はぬものを、残り多オヤ」

(二人)

「これが黄泉路ヨシの障切りぞ」と

解けぬ思ひに涙ぐむ

流るる星の西の空、心は闇よくらがりの、宮につづきし北海道キカイトウ、並木の松の末長き、数珠は至散る露よりも、もろき命の明日知らぬ

(伊八)

「姿をうつせ空蝉ウツセミの」

(おさん)

「身はから衣コモ、脱け殻の」

(伊八)

「うつつ渚のたま呼ばひ」

(二人)

「とりかはしたる誓詞にも、名もはやさきへ血に染みて、かうなる縁の橋柱ハシラ、数え数えし堀川も、あとに見なして古渡フルワケ、今とみ橋におく霜の、白き東雲シノム、山かづら、吹きおろしたる身のかじけ、あす消ゆる身の露霜を、いたはりやうて諸共に、泣き乱るるぞ哀れなる」

<劇中劇の幕が下りると観客の大喝采 かけ声の嵐>

(観客) <拍子に乗って>

「聞きもおよばぬ豊後節。聞きしにまさる豊後節。春のお江戸はこの世の極楽。浮き世の限りを楽しもうぞ。

♪外記はかま、河東かみしも、義太ももひき、豊後かわいや丸裸♪

恋の道まことを映す豊後節。身も心ささげてこそその恋の道。心中こそは恋の極め」

<くり返し熱狂的に>

【第二幕】

<第一場> 吉原遊郭若狭屋、若菜部屋

[場面、豊後掾と若菜の逢瀬の一時]

- 若菜 「中村座の初春狂言も無事に果て、いまは江戸中、豊後節を知らぬ人もなし。道行く人はみな豊後節を口ずさむあり様」
- 豊後掾 「まこと思いのほかなる繁盛ぶり。夢見る心地よのォ」
- 若菜 「また文字様の男ぶりも、若き女性ニョショウたちの評判の的。文字様の髪型は文金髷と申すとかや。江戸の女に真似せぬ者はおりませぬ。また羽織・小袖姿のしどけなきあり様やも、おどろくばかりの流行りよう」
- 豊後掾 「豊後の栄えはうれしきなれど、お上の気受けもいかならむ。法度きびしきお江戸にて、心中浄瑠璃のお許しあるも訝しけれど、この先いかが相なることやら」
- 若菜 「われらもそれを樂じます。このほど世上に不義・密通のいらじるしきは、ひとへに豊後ゆえと巷の噂。よしなき言いようなれど、聞けば胸塞がる思い」
- 豊後掾 「さように悪しき方にのみ、思いなずむまいぞ。とりこし苦勞と言うものぞ。杞憂なり、杞憂なり。お上の沙汰も事なくて、豊後浄瑠璃の天下御免となる日も遠からず。されば、そなたを身請けして、晴れて夫婦木杣の所帯をもとうよ。いましばしの辛抱ぞ、身をいとうて、その日を待てよ」
- 若菜 「ありがたのお言葉かや、さりながら。遊女づとめのはかなさは、いつ消ウせゆくやも知れぬ身の習い。いまかように、ぬし様の、血潮流るる肌のぬくもりを、この身に覚える時のみが、わらわにとりて、生きおる証。自然ゼン、ぬし様に、異変沙汰のある時は、わらはただひとり、この世に止まることはかなひませぬ」
- 豊後掾 「うれしの言葉かや、さりながら。空蟬のうつろなる世とは申せども、冬去りゆかば春来る。いずれ世上の騒ぎも落ら着かば、安穩なる日々も訪れよう。杞憂ぞよ、杞憂ぞよ」
- 若菜 <豊後節と豊後掾の将来を案じる若菜 不吉の予感>
「思いのほかなる巫椿、春のお江戸に花盛り。豊後浄瑠璃の花盛り。日出度きことは限りなし。さりながら。満つれば欠くるが世の習い。このさき、いか

なる災いの迫り来るやらん。

<豊後様に向かって>

わらははぬし様とただ二人、たといひと日たりとて、夫婦のたのらぎりを
結ぶがこの世の夢

豊後様 「われもそなたとただ二人、夫婦の所帯をもつのがこの世の願い。

<モノローグ風に>

恋路の先はいかならん。ぬばたまの闇夜の道は人もなく、ただ二人のみ歩み
行く。あてどなき道を迷いゆく」

<豊後と若菜は、愛と不安とが交錯しつつ次第に心高ぶる中で、ひしと抱き合
う。終幕道行きの世界が超越的な昇華された恋の世界を表現するのに対して、
この場面は生々しく現実的で肉感的な情交の世界を印象づける>

<第二場> 江戸北町奉行所、書院の間

[場面、江戸北町奉行稲生下野守の役所の対客の座敷。北町奉行稲生と南町奉行大岡越前
守、そして儒者(太宰春台)を交えての激しい議論のやり取り。心中浄瑠璃の上演の是非
をめぐる激論]

稲生下野守 「越前殿、このほど、世上のありさまをいかが御覧じか。不義密通は日常茶飯、
駆け落ち沙汰も聞かぬ日はなし。町人風情の仕儀のみならばとにかくも、さ
はあらずして、旗本・御家人まで悪習に染まり、果ては大名の奥向にまで不
義密通の噂。この稲生下野イウシツケ、町奉行のお役をこうむりてよりこの方、
かかる安りがわしき振る舞いを目にしたることなし。江戸の町はかしこくも、
將軍家のお膝元。風儀、地に墮らたるあり様を何とする」

大岡 <大岡は返答なしえず、ただ沈黙するのみ>

稲生 「こたびは太宰殿にもお越しいただいた。
太宰殿、儒者としてのお考えは如何に」

儒者、太宰 「まこと江戸開けしよりこの方、聞きもおよばぬ失態。道行く男女は人目には
かることもなく、心中豊後節を思いのままに放吟し、稽古所とやらん、いか
がわしき所にて、男女集ひて浄瑠璃稽古とかや」

稲生 「稽古と唱えて、何をしおるかは知れたこと。もはや禽獣・畜生のいとなみに
異ならず。人倫絶え果て、天下の政道すでもって壊乱の体」

太宰 「われら儒学のともがらは、家康公の学問採用よりこの方、百年の年月かけて
人倫の道を世に広めけり。その辛勞のほどなむ思ひやらる。しかるに豊後
様とかや、賤しき音曲のともがらの故もって、たらまらに破られたるこそ口
惜しけれ。五倫・五常の道は打ち崩れ、天下の政マツリゴトはその法川を失う。

越前殿、何とて、かかる由なきものをお許しなされしぞ」

稲生 「越前殿、御返答やいかに！」

大岡 <少しの沈黙の後に、呻くように モノローグ>
「何とて、かかるあり様になり果つる。豊後浄瑠璃を許せしは、ひとへに民のため。かつうは芝居者の生業+ワイを助けんがためのこと。
民を信じてのことなるに、余りの乱れがわしき有様に声を失い、心も張り裂く。民とはそも何者なるぞ。民は国の本にあらずや。天物言わず、民をして語らしむとかや。さればこれが天の声とてか、国の基トイの姿かや」

<重苦しい空気が評議の場を包む中、屋敷の外から民衆の熱狂乱舞の声が聞こえてくる>

民衆 <拍子に乗って>
「聞きもおよばぬ豊後節。聞きしにまさる豊後節。春のお江戸はこの世の極楽。浮き世の 限りを楽しむうぞ。
♪外記はかま、河東かみしも、義太ももひき、豊後かわいや丸裸♪
恋の道、まことを映す豊後節。身も心ささげてこそ恋の道。心中こそは恋の極め」
<民衆の熱狂乱舞の声は次第に大きくなり、評議の場を包み込む>

【イリュージョン illusion】

<あたかも津波の怒濤が押し寄せるが勢いをもって、歌いつつ熱狂乱舞する群衆は、土足のままで評議の座敷に入り込み、三人の周りを巡りながら乱舞・合唱して、次第に座敷の反対側へと通り過ぎてゆく。評議の席の三人は、これをただ呆然とながめやるのみ>

稲生 「見たか大岡、これ御政道の失墜と言わずしてなんとする。
これぞ衆愚のきわみ、醜悪のきわみなれ」

大岡 <沈黙>

太字 「もはや一刻の猶予もありません。この病弊をいま絶たずば、政マツリゴトはその法川を失い、悔いを千載に残しましょうぞ」

稲生 「豊後節は厳しく停禁、豊後掾は江戸追放。これにて御異存ありますまいな」
<稲生が勝ら誇ったかのように高らかに宣言する中で場面転換>

<第三場> 豊後掾の江戸稽古所、豊後掾と文字太夫の別れの場面

[場面、豊後掾の江戸堺町にある稽古所の一室。豊後掾と文字太夫との対話。]

文字太夫 「恐れていたことが生じてしまいました。豊後浄瑠璃は江戸御府内の興業を禁じられ、御師匠さまは江戸追放とのきびしい御沙汰」

豊後掾 「かかる成り行きも、もとより覚悟の前。なに、うろたえることもない。
われはこれより都に戻り、上方にて豊後節の再興を期する存念。さりながら、心残りはこの江戸のこと。かくも流儀は大繁盛を見せたるに、このまま幕引くことの口惜しさよ」

文字太夫 「ごもっともに御座います。無念の気持ちはわたしとて同じこと」

豊後掾 「さいわいなるかなお上の答めは、汝には及んでおらぬ。されば汝はこの江戸にとどまりて、豊後浄瑠璃再興の時節を待つがよい」

文字太夫 「わたくしも、お師匠さまと上方へもどりとう存じます」

豊後掾 「いなとよ、汝は江戸に残るべし。お上の勘気もいずれ解けよう日もあるう。また豊後の名に代えて新たに一流を立てるも思案のうら。
<しばし熟考したのら>
われは宮古路豊後掾。汝は関東の名号ヨウゴウを立つるべし、かつはまた常磐木の千代に榮えて歸なす、そのごとく常磐津とも名乗るべし」

文字太夫 <驚き、かつ感極まって>
「関東にて御座いますか、常磐津にて御座いますか。
関東の、常磐津文字太夫にて御座いますか」

豊後掾 「さよう、京の宮古路豊後掾、関東の常磐津文字太夫。東西あい並びて、流儀の繁栄を目指しようぞ」

文字太夫 <感激の面持ちの中に、かみしめるように>
「京の宮古路豊後掾、関東の常磐津文字太夫……」
<文字太夫の声が小さく消え入るように引くうちに第三場の終わり。暗転>

<第四場> 茶屋井筒屋の座敷 [終幕]

[場面、吉原内の料理茶屋の奥座敷。豊後掾と遊女若菜の逢瀬の情景]

豊後掾 「上野の御山を飾りたる桜の花も散り行エきぬ。かくも盛りを誇りし花の榮華も一時の夢。まこと、常なき人の世のならい。定めなきこそ定めなれと、古人の歌ひしもむべなるかな」

若菜 「豊後節はきびしき御答めを蒙り、ぬし様は江戸をお構いの身となり果つる」

豊後掾 「われらはこれより江戸を立ち退きて、上方に赴かむ。しばしの別れを許してくれよ」

若菜 「イヤ、しばしの別れとぬし様は申されど、いつ再び会えましょうや。われら

はかなき命の遊女の身には、今生の離別と思はれます」

<豊後節と豊後掾に対する御上の赦免は遂にありえないのではと感じる若菜にとっては、豊後との離別はこの世での永遠の別れとなるであろうことを思い、どうあっても豊後を放すまいと懸命にすがりつく>

豊後掾 「さやうに根を詰めて考えるものではない。御上おのの御勘気がかきとても、いづれ解けようものから、養生に心して我の帰りを待たれよ。上方にては何ぞ金子などの才覚工面して、そなたの身請けを思案しようものから」

若菜 「うれしの御言葉かな。ぬし様とせめてひと日たりとも夫婦メトの世帯をもつが、わらわの夢なれば」

豊後掾 「しばしの別れを肯が工じてくれよ」

<抱き会う二人。しかし若菜は再び現実に立ち返って、豊後節の置かれている状況を鑑みるならば所詮、二人の再会が不可能であることを感得する>

豊後掾 「あな恨めしのこの世かな」

若菜 「恋のまことに偽りはなけれども、不義・密通のそしりをいかで逃るべき」

豊後掾 「豊後の音曲に罪咎ツミがはなけれども、煩惱深き衆生の振る舞いをいかがかはせむ」

若菜 「ぬし様と現世ウツシヨにて再びまみえむことは叶ふまじ。あはれ、わが身をいかがせむ」

豊後掾 「さりながら、御上の法川は厳しけれど、いつか赦免もあるならむ。時うつり事さりゆかばおのずから、季節の四時シジを経めぐりて、雪にしおる木々よりも、春の若芽はふき出る。これみな、この世の習いぞかし。身をいたはりて時の来るを待とうぞ」

若菜 「御赦免の、時のいたるは、いつならむ。ぬし様の浄瑠璃は、恋の真マコとうつす増鏡。とてものこと、御上の勘気の解ける時節はよもあらじ」

若菜 「あな恨めしのこの世かな」

豊後掾 「豊後の音曲は厳しき法の咎を受け、身の置き所なきぞ悲しけれ」

若菜 「身の置き所なきぞ悲しけれ」

<あたりの情景はしだいに夕暮れに包まれゆく。不条理な運命に翻弄され続けな

からも、名残をいつまでも惜しむ二人>

<二人を包む愛の情感は、突如、梵鐘の音によって打ち破られる>

豊後掾 「あれは浅草、浅草寺のソウジの入相の鐘。いまは江戸お構いの刻限も近づいた。御役人も大門にてお待ちのことであろう」

若菜 「いま暫し、おとどまりを」

豊後掾 「時の移りゆくのが恨めしい。されば名残の形見に、豊後の浄瑠璃をひとふし語らむ。これは豊後一世一代の語り、そなたへの恋の契りの証しと思うてくれよ」

<「睦月連理玉椿」の心中道行き。本来の豊後節の三味線音楽から始まり、しだいに管弦楽をともなう現代音楽に入れ替わり、展開していく>

豊後掾 「雪と綿とは同じ白さでも底の心のうらおもて、夢に夢見る夢人に、うつつと人によそながら、暇乞仕ゴイしてふたりづれ、色づく梅のつぼみより、いひかはしたる一筋が、今宵まことと、うたがひの晴れつついづる星月夜、西へ心の一つ松、小夜婦の寝覚めを響くらん」

<調子を変えて>

「いざ行こうぞと玉鉾の、道のあかりの眩さは、かけ行燈をわれわれが、死にゆく身の送り火と、見返る軒に淡雪と、消ゆるに間なき浅ましや」

<豊後が語り歌ううちに情景は次第に変わって、豊後と若菜は「睦月連理玉椿」の心中道行きの伊八・おさんに成り代わって立ち現れる。音楽もしだいに三味線から管弦楽による現代音楽へと入れ替わり、この管弦楽によって情景の転換を表現する>

豊後掾 「のう若菜、そなたを根引きにかうか連れて出づるというたら嬉しかろ。われゆえに黄泉の旅路の道連れに、誘ひたいゆくぞ浅ましき。ア、はかなの人の姿や」

若菜 「はて豊後さまもわれ故に、さかりの花のうめが香を」

二人 「吹き散らしたる朝嵐」

豊後掾 「姿をうつせ空蝉ウツセミの」

若菜 「身はから衣コモ、脱け殻の」

豊後掾 「うつつ渚がサのたま呼びひ」
「せめて一日世帯タイして、ぬし女房と言ひ言はれ」

若菜 「たとへいかほど浅ましき、賤ジの世渡りするとも」

豊後掾 「厭仆はぬものを、あな名残り惜しや」

<場面は心中の死の雰囲気を漂わせつつ、時に陰鬱に、しかしまた恋の成就につき進む高揚感をも伴いつつ複雑な展開を示す>

豊後掾 「道は黄泉路の旅なれど、恋のまことを映す道」

若菜 「たとひこの身は消ウせるとも、永遠トワの契りとなるぞ嬉けれ」

二人 「時こそ止まれ！ とこしえの恋の証アガシとならうよ」

<愛と死の情感が交錯し、高揚していく中で、幕>